

# 第 3 章

## 高大連携による活性化の効果

和田 義 人

### 目 次

はじめに

第1節 高大連携が必要とされる背景と課題について

第2節 高大連携における大学の役割

第3節 高校生の提案を取り入れた地域イベント（「ローカル線と古道歩き」）の概要報告

第4節 今後に向けての課題

## はじめに

“地域活性化”という言葉が頻繁に使われているが、果たして“地域”はいかにして活性化するのか？地域が勝手に活性化してくれるわけではなく、様々な仕掛けを施し、一瞬“活性化した”かのように思えるイベント等が散見される。そうしたイベントを全面的に否定するものではないが、最も大事な視点は“地域住民”の「意識」だと考える。

例えば補助金（交付金）ありきで、大手旅行代理店やコンサル会社の企画に乗っかることが目的化してしまい、本質的なマーケティング不在のまま、地域的要素<sup>1)</sup>が見逃されてしまっていないだろうか？イベントが企画され、打ち上げ花火のように一瞬の輝きはあるが、長続きせず先細ってしまっただけでは意味がない。地域住民が本気になって、観光に活用できる資源に目を向ける「意識」を持てるかであり、さらに言うならば、地域住民の中でも若者たちが本気になってくれるような土俵（フィールド）を大人たちがアレンジできるかだと考える。

そうした意味で地元の高校生に視点を向け、本学の大学生を絡めた“高大連携”がどのように展開され、効果を発揮できたのかを、述べることにする。

第1章では、全体感として（我が国の問題として）高大連携が必要とされる背景と課題について述べる。第2章でその具体的な大学の役割、特に本学が力を入れて取り組んでいる「アクティブラーニング」の有効性について述べながら、実際に行われた出張講義やキックオフミーティングの意義と成果について述べている。第3章では、地元高校生の提案を取り入れ、かつ実際に協力しあいながら行われた地域イベント（「ローカル線と古道歩き」）の概要報告、最終の第4章で今後に向けての課題と展望を考察している。

### 第1節 高大連携が必要とされる背景と課題について

本研究は千葉県における地域経済の活性化について、観光という手法を用いて実現することが可能かどうか検証することを目指したものである。<sup>2)</sup>ではなぜ「高大連携」なのか？二つの切り口でその背景と課題について述べる。

まず一つ目は、本研究で取り組んだ「観光」が地域的要素の中でも、サステナビリティを重視した、“住民の生活文化等”に視点を向けた点が大事なポイントである。前章でも

---

1) 本編 鈴木孝男「第1章」より引用 地域的要素（都市、自然環境、産業、歴史、住民の生活文化等）

2) 同上

## 高大連携による活性化の効果

述べたとおり、地域活性化は地域住民が本気になって初めて実現するものであり、しかも、未来に繋がる地域活性化でなければならないとすると、必然的に地域の若者たち（高校生）に視点が向けられることになる。

そもそも本研究のスタートラインは地元のローカル線である久留里線<sup>3)</sup>をどう活性化させられるか?であった。人口の構造的な変化、またアクアラインを利用したバス路線の拡大がローカル線を利用していた地域住民の生活の足を変えしまった。久留里線の利用者のほとんどが通学目的の高校生である事にあらためて目を向けると、未来を担う主役である高校生の視点から、あらためて久留里線沿線の“地域的要素”に目を向け、また高校生の知らない“地域の魅力”を掘り起こすプロセスが最も重要であると考えた。さらに言えばそうした高校生たちの“感性（地元を愛するところ）”に誰がどのようにして火を付けるか?という課題解決において最も期待できるアクションが本学人間社会学部の教育カリキュラムで重視しているアクティブラーニング（以下AL）と地元の高校生を絡めた「高大連携」であった。

この研究課題を実際に進めるにあたり、もちろん久留里線を運行する「JR東日本」「行政」（千葉県、君津市、市原市、袖ヶ浦市、木更津市）「観光協会」「久留里駅前商店会」「商工会議所」「JA」そして地域の活性化委員会等の協力なくしては、実効性のあるイベントを行うことは不可能である。だからこそ、「地元の高校生たちと、大学生が一緒に動き出した」という、大人たちが本気になれる”新たな風“を吹かせることの意味は大きかったと考える。

二つ目の背景は我が国の人口構造の変化、とりわけ2018年問題に象徴される高校生の絶対数の低下と、それに伴って大学全入時代を迎えるという未来像である。

大学教育のあり方が今後も引き続き議論されることは当然であるが、さらに大事なことは、大学進学というハードルが、乗り越えるべき難関ではなく、いとも簡単にまたげてしまう存在になってしまう過程で、東京大学を頂点としたいいわゆる全国難関大学は別として、高校生たちに“学ぶ”意欲をどう持続、向上させるのか、“やる気”をどう引き出すか、という課題に対し、本研究における「高大連携」が大きな意味を持っているという事である。

ストレートに申し上げれば、かつて大学進学という目標に対し、偏差値という“ものさし”で「動機付け」を行ってきた教育環境は、もはや現代の高校生たちにとっては「ほと

---

3) 木更津～久留里 2013年度 JR 東日本輸送密度低い順ランキング50位 1,945人/日 旅行総合研究所タピリスより引用

んど意味のない、厄介なもの」でしかなくなってしまうように感じる。スマホが彼ら高校生の“身体の一部”として機能してしまっている今、問いかけに対し、条件反射的に“スマホ検索”を行い、“正解らしきもの”をスピーディーに見事に引っ張り出しってくる彼らの反応は、彼ら高校生が置かれた社会環境における恐ろしいまでの“省エネ行動”であり、そこには「自ら学ぶ」という「動機付き」はほとんどお目にかかることはない。

あるとすれば、資格取得を目的とした試験対策に頑張る姿、グローバル社会に適應するために外国語をマスターしようと努力する一部の高校生たちの姿かも知れない。

今後の教育のあり方の根本は、「動機付ける」教育（教え込む教育）ではなく、自ら「動機付く」ような“場作り”と“現場から学ぶ”きっかけ作りだと考える。

そもそも、「やる気」には「(+ )のやる気」と「(- )のやる気」があって、型にはめる教育、上から見下ろし、怒鳴りつけ、レールに乗せる教育下においては、高校生たちは「やればいいんでしょ!」と、怒られない、ダメと言われない範囲内までしか努力しない。一見努力しているように見えるが、所詮“自分を守る”レベルの努力なので、際立った“伸び”がみられない。そのやる気が「(- )のやる気」である。そうではなく、自ら動機付き、課題に向き合い、様々な経験を実践し、そのプロセスからさらに新たな課題に気付き、考え、挑戦して行く“やる気”が「(+ )のやる気」である。

本学人間社会学部で重視しているALはまさに(+ )のやる気を引き出す「やってみる、という学び方」である。従って、本研究においても、「高大連携」という“土俵”をしつかりと準備し、その土俵で高校生と大学生が自らの意思で協力し合って「地域活性化(久留里線活性化)」という課題に対して、地域の大人たちの応援も得ながら“相撲を取った”ということかも知れない。

## 第2節 高大連携における大学の役割

### ■<アクティブラーニングの有効性>

2018年から18歳人口の減少が本格的に始まり、いわゆる「大学の大量倒産時代」が目前に迫っている。各大学は受験生集めに奔走し、オープンキャンパスでは独自色を打ち出すべく、試行錯誤の取り組みが展開されている。本学人間社会学部でも、3年前の新学部スタート時点からアクティブラーニング(以下AL)に力点を置いた教育指導を行っており、実は本研究もその延長線上に位置付けされるものである。

そもそもALとは、いかなるものなのか?中央教育審議会(2012年8月)の報告書で

## 高大連携による活性化の効果

は次のように示されている。

「生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見出していく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である。すなわち個々の学生の認知的、倫理的、社会的能力を引き出し、それを鍛えるディスカッションやディベートといった双方向の講義、演習、実験、実習や実技等を中心とした授業への転換によって、学生に主体的な学修を促す質の高い学士過程教育を進めることが求められる。学生は主体的な学修の体験を重ねてこそ、生涯学び続ける力を修得できるのである。」

そしてアクティブラーニングの文部科学省の定義としては「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である」<sup>4)</sup>と説明されている。

本研究における高大連携のスタートイベントとして2015,4,18木更津東高等学校にてキックオフミーティングを開催している。(写真参照)その後、5月～7月にかけて木更津東高校、君津高校、袖ヶ浦高校で出張講義を実施、さらに、地元の高校生たちにあらためて地元の魅力をピックアップしてもらう目的で「高校生フォトコンテスト」も実施した。

7月28日には高校生フォトコンテストの審査が行われ、38点の応募作品の中から最優秀1点、優秀3点、佳作10点を選定し、8月2日、本学において開催された「久留里線プロ



キックオフミーティングの様子（2015,4,18）会場：木更津東高校 正心ホール

4) 出典：平成24年8月28日中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」



久留里線プロジェクト報告会・フォトコンテスト  
表彰式 (2015,8,2)



木更津高校「夢コン」説明会 (2015,9,3)

「プロジェクト報告会」で表彰式も行われた。(写真参照)

いずれも高大連携をベースとしながら AL の教育的効果を意識しながらの活動であったが、この段階で特に意識したのが、地元の高校生たちの発想(政策)を具体的な形で、どのように地域活性化に結び付けるか、であった。しかも、その政策提案はできる限り継続性が求められ、従って必然的に行政機関、JR 東日本、商工会議所、JA、等との連携、久留里線活性化プロジェクト実行委員会の協力が必要であった。

前述キックオフミーティングを4月に地元木更津東高校で行い、来賓挨拶に高校生代表(木更津東高校 生徒会会長)、本学学生代表(人間社会学部2年生)をメインに位置づけしながら、千葉県、木更津市、君津市、袖ヶ浦市の担当者、JR 東日本千葉支社(木更津駅駅長)にもご挨拶を頂いたのも、そうした考え方が背景にあった。

### ■<久留里線夢づくりコンテスト(夢コン)の意義と成果>

最も大事な政策提言の発表の場であるが、11月28日(土)木更津東高校正心ホールにて「久留里線夢づくりコンテスト(夢コン)」が開催され、最優秀賞に君津青葉高校、優秀賞に木更津高校と木更津東高校、努力賞に木更津高校映画研究部が選出された。

このコンテストにも本学人間社会学部の学生代表がエキシビジョンとして政策提言を行い、高大連携を通して地域活性化が実践されることを、しっかりとアピールすることができていたと思われる。特に、審査において、久留里線活性化プロジェクト実行委員会会長、3市を代表して君津市企画政策課副課長、君津市商工会議所副会頭、木更津市商工会議所専務理事、君津農業協同組合経済部営農課課長、木更津市農業協同組合経済部営農課課長代理、JR 東日本千葉支社木更津駅駅長、そして本学人間社会学部の鈴木孝男教授が審査基準を明確にした上で厳正な審査に関わって頂き、そのプロセスも参加してくれた高校生諸君にとっては大切な学びになったと思われる。

## 高大連携による活性化の効果

ちなみに、審査は1) 夢(楽しさ、明るさ、ワクワク感など)を感じさせる企画であるか。2) テーマに沿って企画の筋道が立っているか。3) 企画を実行し成果を上げることが可能であるか。4) スライドや話し方などプレゼンテーションの仕方に工夫があるか。の4項目の審査基準について5段階で採点し、審査された。

集計結果については、高校生チームだけに順位を競うことにし、最優秀賞には図書カード2万円分、優秀賞2本は図書カード1万円分、努力賞には5千円図書カードが贈呈された。この図書カードを賞品にするというところにも、地域活性化に向けたコンテストでありながらも、根底には教育的な配慮があり、発表された政策提言が単なる“夢”発表ではなく、具体的な企画として実行されることを前提に、その実践に向け高校生諸君には新たな学びをし続けてほしいという主催者側の意図が含まれていた。

メディアの反応としては、夢コン開催の翌日11月29日、朝日、読売、千葉日報の朝刊に掲載、12月5日には、千葉テレビ「ウィークリー千葉」で約9分程度放送された。

このような形で高大連携(高校生、大学生の取り組み)がメディアに取り上げられる事は、参加してくれた学生たちにとって、特に企画を実践して行く上で、大きなモチベーションファクターとなったと評価できる。また、実践の過程で協力側となる“大人たち”にとっても、この高大連携は地域活性化(久留里線夢づくり)に向けた新たな追い風になったと思われる。

### ■<出張講義と能力形成>

そもそも、なぜ高大連携が重要視されるか? 高校教育と大学教育は何がどう違うのか? 高松正毅氏は高崎経済大学産業研究所【編】「高大連携と能力形成」でその違いについて次のように述べている。「小中高のいわゆる学校教育は、教育内容が学習指導要領によって明確に規定されている。そして、試験問題は短答式かマークシートがほとんどである。結果的に、学習は記憶が主となり、試験に正答するためのものになる。それに対し、大学は学習指導要領に当たるものはなく、学びの内容には際限がない。また、大学での学びの中心は覚えることではなく、自分の頭で考えることであり、レポートや論文といった記述や論述が重要となる。さらに、ゼミナール(演習)では、レジュメやパワーポイント(発表用資料)を準備し、プレゼンテーション(発表)することが求められる。すなわち、学びの大転換が必要になるということである。教育機関として最も重要な教育面において、この学びの転換を目的として行われるのが、高大接続教育だと言ってよい。」<sup>5)</sup>

---

5) 高崎経済大学産業研究所【編】2013年3月25日 日本経済評論社 第2章P48

本研究においても、木更津東高校、君津青葉高校、袖ヶ浦高校の3つの高校で出張講義（出張ゼミ）を行い、高校生たちと本学人間社会学部の教員と学生とで、地域の魅力発見活動を行い、その結果をまとめて「るるぶ 特別編集 久留里線ガイド」を作成している。そうした高大連携活動を通して講義だけでは身につかない“能力形成”が実践されたと思われる。その“能力”が「社会人基礎力」だ。

■<社会人基礎力とは>

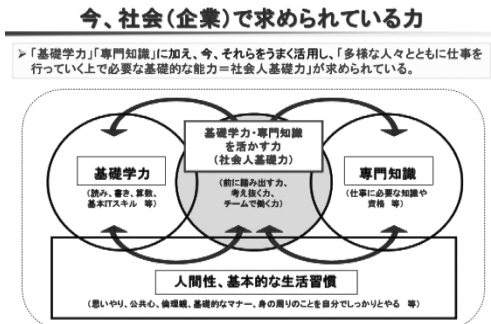
経済産業省は、2006年、「職場や地域社会で多様な人々と仕事していくために必要な基礎的な力」として「社会人基礎力」を明確化し、人材育成の目安を示した。

社会人基礎力は、若者自身はその成長の目標とすべき「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」の3つの能力とこれらを構成する12の能力要素から成る。<sup>6)</sup>（表1、表2参照）

その「社会人基礎力」の目指すものとして、平成25年度産業経済研究委託事業「社会人基礎力育成の好事例の普及に関する調査」報告書（平成26年3月 株式会社リベルタス・コンサルティング）において次のように述べられている。

- ①『前に踏み出す力』は、一步前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力として「主体性」「働きかけ力」「実行力」を要素に構成している。指示待ちにならず、一人称で物事を捉え、自ら行動できるようになることを目指している。
- ②『考え抜く力』は、疑問を持ち、考え抜く力として「課題発見力」「計画力」「想像力」で構成する。通常「考える」には論理性等の要素が取り上げられがちであるが、社会人基礎力においては、決まった答えを導き出すこと以上に、自ら課題提起し、解決のため

表1



出所) 経済産業省ホームページから引用

表2



6) 「社会人基礎力」の詳細は経済産業省ホームページを参照



のシナリオを描く、自律的な思考力の獲得を目指している。

- ③『チーム基礎力』は多様な人々と共に目標に向けて協力する力として「発信力」「傾聴力」「柔軟性」「状況把握力」「規律性」「ストレスコントロール力」で構成する。グループ内の協調性だけに留まらず、多様な人々との繋がりや協働を生み出す力を目指している。

さらに重要なのは「成長の合言葉」として、教育の現場で学生と教員、関わる社会人の中で共有し、活用する視点である。人の成長においては、「現実を認識し、将来を見据える」中で、「目標を立て、実行し、内省する」、これを「さらに次の目標につなげ、成長のPDCA サイクルをまわしていく」ことが重要である。この際、目標を「言葉」にし、自ら意識することで「立ち戻って考える」ことができ、また、他者に共有することで「対話」が生まれ、「アドバイスやフィードバックを受ける」ことができる。このように「言葉」を通じて活動から得られる成長成果を最大化する。「学習の場を真に成長の場」とするために、「教える側」「関わる人々」「教わる若者」の間で活用される「合言葉」を通じた『対話』の促進、これが社会人基礎力育成事業を通じて実現したい教育の変革である。

そうした「教育の変革」あるいは「学びの転換」という切り口で高大連携を考えた時に、あらためて『聴く』ことのできる能力、『話す』ことのできる能力、そして『環境変化対処能力』が現代の高校生、大学生に相対的に劣っているように感じる。

そもそも、いわゆる“今どきの若者たち”は“自分の頭で考える”ことがあまり得意でないようだ。スマホが生活における必需品となり、スマホに触れている時間が一日5～6時間という依存症的な若者たちが増えていることは間違いのない事実である。

彼ら、彼女たちは、新たな課題に遭遇すると、自分で考えるのではなく、まずスマホで検索するという動作が一般化してしまったように見受けられる。そうすると、課題にたいする解決(正解)を自らの頭で考え、答えを導き出して行くという思考プロセスではなく、スマホから“答えらしきものを引っ張り出してくる”ということが、あたかも学習であるかのようなスタイルが定着しつつあり、そのことは今後の我が国に必要とされる人材育成という課題にとって、甚だ厄介な問題であるような気がする。<sup>7)</sup>

あらためて“能力”，特に今後ともめられる“能力”について述べておきたい。

“能力”を二つの概念で捉える。一つは ability，もう一つは competence。

---

7) 和田義人「大学のマーケティング力で市場をつくる」『CUC View & Vision No42』P20

ability は一般的に用いられている能力で“練習，訓練することによって上達する能力”。competence は一言で表現すると“環境の変化に対処できる能力”である。

高度経済成長期に必要なとされたのは、敷かれたレールの上をできる限り忠実に、正確に、スピーディーにやり遂げることのできる、大量生産、大量消費社会に適応できる人材であり、兵隊としての“能力 (ability)”であった。だが、我が国は人口減少社会、少子高齢化社会を迎え、かつ昨年の参院選では、消費税増税の先送りを与野党すべてが是認し、「社会保障の充実」を言いながらも、財源は不明という、中高年には優しいが、将来世代にツケを回すという相当に厳しい状況である。そうした流れの中、あらためて必要とされる”能力“が competence であろう。

環境の変化に対処できる“能力”は、今すでにある文化（ものの考え方、処理の仕方）の部分修正、焼き直しではなく、新しい概念創造である。しかしながら、いわゆる“今どきの若者たち”は先にも述べたように、スマホ文化の影響もあって「抽象概念思考」が苦手になってしまった。<sup>8)</sup>

だとすると、だからこそ、ディスカッションのできる能力が高大連携における、とりわけ、大学生と高校生が違ったスタンス、異なった視点で新たな概念（考え方）を創出して行く過程で必要不可欠になってくる。当然のことながら、出張講義において、また、プレゼンテーションにおけるアナウンスメント能力も、この「ディスカッション能力」を身に付ける学習プロセスが基底フィールドになる。

あらためて学生たちの日常に目を向けてみよう。前述のようにスマホが身体の一部になってしまった彼ら、彼女たちは、“思いを伝える”ための手段として「会話」より、「スマホ」を多用する。耳で聞く（聴く）より、目で“読み取る”ことがコミュニケーションスキルの基礎となり、その過程で、“思い”が伝わらない、伝わってない、違った解釈をされるのでは？という不安から、いわゆる「絵文字」「顔文字」が生み出され、同時に「画像（インスタグラム）」が多用されつつある。その「顔文字」が我が国で生み出された事実は、日本文化の“曖昧さ”の象徴的な現象かも知れない。

この現象の背景には、言葉で伝えるという文化がスマホ経由に変質してしまった過程で防衛的、アシスト的になってしまった若者たちの“歪み”があるように思える。一方でフェイクニュースによって、いとも簡単に民意を操作、操られてしまう現実は大きなりスクも内包しているように感じる。

では、現実の場面（ディスカッション）ではどうなのかというと、当然のことながら事

---

8) 同書 P21

前の講義（事前学習）が必要だ。

### ■<listen と hearの違い>

<hear の定義>

- ・ to be aware of sounds with your ears

<listen の定義>

- ・ to pay attention to someone / something that you can hear<sup>9)</sup>

この2単語は中学生の英語で学ぶが、違いを説明するなら listen は意識してしっかり聴く行為であり、hear は自然と聞こえること、と説明できるだろう。従ってここが大事なポイントだが、漢字で表現する時も、「聴く」と「聞く」は区別して表記すべきだし、ディスカッションの時は「聴く」姿勢が求められる。

出張講義においても、先方の高校生とディスカッションが想定される場合は事前学習で「listen と hear の使い分け」を指導するし、教員はそのディスカッションに参加しながら、学生たちの「聴く姿勢」を評価する。

### ■<受容・歪曲・拒絶>

人と話をする際、特にその話（会話）を通してあるテーマに発展的な展開を期待する場（すなわちディスカッション）においては、「受容」という“姿勢”が大事だ。基本的に人は「自分が一番大事」であり、自然と、あるいは本能的に“自分を守ろうとする”メカニズムが発動する。そのことをフロイトは「defence mechanism」（防衛機制）で人の成長過程を論じている。「自分を守ろうと防衛機制が発動している間、人は成長しない」という命題をディスカッションの過程に当てはめると、人の話を受容できないで、防衛的になっているディスカッションは、その過程で、人の話を聴くことができなくて、自分の都合のいいように解釈して“聴いている”ポーズを取ったり、あからさまに聞こえていない、あるいは聞こえていたが、シャットアウトしてしまう。しかも、その一連の行為が“無意識”の内に行われると、グループダイナミックスの効果が発揮されることは絶望的になってしまう。最悪の場合は信頼関係が崩れ、チーム自体が崩壊し、そのチームパフォーマンスの発展性がなくなってしまう。

残念ながら、我が国の教育スタイルは「一方通行のトップダウン式知識伝搬モデル」<sup>10)</sup>という指摘がある。だからこそ、先に述べた「久留里線夢づくりコンテスト（夢コン）」

---

9) Oxford Advanced Learners Dictionary より抜粋

の意義は大きい。高校生諸君の“政策提言の発表の場”としてコンテストが企画され、しかもコンテストである以上、そこに真剣勝負のいい意味での“競い合い”があった。本気になって、母校の名誉を背負いながらプレゼンを行う姿は本当に素晴らしかったし、その発表のすべてが私たちの想定を超えた出来栄であったという事は、そのプレゼン資料を作成するプロセスにおいて、高校生たちはチームパフォーマンスとして、講義では得られない学びと成長があったと評価できる。

聴く姿勢から「受容」に繋がり、チームパフォーマンスを高いレベルで実行する為には、結果的に、「聴けない姿勢」（拒絶，歪曲）が否定されることを大学生はALの様々な経験から学び、その学びがこの「高大連携」というプログラムを通して高校生たちの“自らの学び”に繋がった。

キックオフミーティング～出張講義、その後に開催された高校生フォトコンテスト、久留里線プロジェクト報告会、そして久留里線夢づくりコンテスト（夢コン）、すべてが“高大連携”という新たな教育理念をベースに進行し、高大双方に大きな成果があったと考える。しかしながら敢えて述べるなら、その成果の土台作りにおいて本学人間社会学部で学ぶ大学生の果たした役割は大きかったと思う。

### 第3節 高校生の提案を取り入れた地域イベント （「ローカル線と古道歩き」）の概要報告

この節では地元の高校生の提案を取り入れ、地元と大学、高校生と大学生、そして多数の方にご参加頂き、地域住民の方々と協力し合いながら行われた地域イベント（「ローカル線と古道歩き」―千葉の里山秋めぐり―）の概要報告をさせて頂く。

このイベントは2016年11月23日（祝）に開催された。申込者は42名であったが、あいにく当日の朝は小雨模様で冷え込んでいた為、3名が参加を見送られ、実際に歩いた方は39名であった。アンケート回答数33名の男女内訳は男性20名、女性13名、年齢構成は29歳以下7名、30歳代3名、40歳代5名、50歳代9名、60歳代6名、70歳代2名であった。

コースは小湊鉄道「養老溪谷駅」からスタートして、JR久留里線「久留里駅」までのコースで、里山コースと古道コースの2コースが用意されていた。里山コースは全長約16km、舗装路が多く、一部を除き平坦で道幅は車が通れる程度のファミリー向きが「里山コース」、古道コースは、一部路面が舗装されておらず、倒木などで歩きにくいところ

---

10) 伊藤穰一 (2017) 「9 (ナイン) プリンシプルズ」早川書房 204頁

## 高大連携による活性化の効果



旧福野小学校



校長先生と生徒さん



教頭先生と生徒さん

もある本格的な古道愛好者向けという設定であった。このコースを設定した理由としては、1) 一帯が紅葉の名所として有名 2) 農業遺産や史跡などが多い 3) 小湊鉄道と久留里線を繋ぐことはできないか? という背景があった。<sup>11)</sup>

里山コースの途中には旧福野小学校が休憩ポイントとして用意され、その旧福野小学校はその日のみ君津市の管理のもと内部が開放され、木更津東高校の生徒さんが企画したお弁当、和菓子を、高校生自らが販売を行った。木更津東高校の先生も立ち会いながら、生徒さんが一生懸命商品の企画説明を行い、参加された方々も笑顔で会話を交わす風景は地元の業者、高校生、大学生が連携して企画したイベントの象徴的な場面であった。(写真参照)

この「ローカル線と古道歩き」という高大連携、地元、行政、が連携したイベント開催までにほぼ2年間の準備期間があった。2015年4月のキックオフミーティングに始まって、出張ゼミを3回、8月にはフォトコンテスト、プレゼン大会を行い、さらに出張ゼミを2回、11月に「夢づくりコンテスト(夢コン)」を開催し、高校生たちの企画提案をベースに実現可能な内容を取り入れたイベント企画立案に向けて、古道調査を3回行っている。その調査の間に2016年3月里山シンポジウムを開催、学術的な視点からの調査発表を高大連携の流れの中で実施しており、そうした経験と専門的な情報をベースに大学生を中心にイベントマップを作成している。

11月23日(祝)開催された「ローカル線と古道歩き」に参加した学生は総数27名(男子18名、女子9名)であった。その内20名が前日から養老溪谷の旅館に1泊し準備を行っている。

---

11) 千葉商科大学経済研究所シンポジウム(2016年12月17日)報告要旨・資料より引用

### ■<“安全対策”から見えた学生たちの成長>

イベント開催時における「緊急時対策」には“完璧”は存在しない。万が一事故が発生した場合は、その場にいたスタッフの的確かつスピーディーな状況把握と意思決定が求められる。この場合の意思決定とは、119番通報と、実行可能なりカバリングである。と同時にプロジェクトマネージャーへの報告が大事だ。

このイベントに参加した大学生27名は4年生2名をヘッドに「緊急時連絡用マニュアル」を自分たちで作成していた。イベント前日の夜、夕食後のミーティングでそのマニュアルについての再確認が行われ、さらに参加される方に高齢者もおられることからイベントに限定してレンタルしたAED（自動体外式除細動器）の講習会も行っていった。（写真参照）

この日の晩の学生たちの顔つきは、大学の教室で見るといつもの“顔つき”とは明らかに違っていた。教員からの「一方通行のトップダウン式知識伝達モデル」ではなく、学生同志が課題（明日のイベントを無事にやり遂げる）に対し真剣に向き合い、お互いが協働メンバーとして役割分担し合い、あってはならないが、事故発生時における的確な判断とスピーディーな行動を起こすことができるような“心の構え”ができていたように思う。

自ら考え、変化に対処できる“能力”，前章で述べた「社会人基礎力」を各自が前向きに実践していた。このイベント開催に向けた幾つかのAL，高大連携を絡めた数々の打ち合わせ（ディスカッション）そうした流れ（実際に“やってみる”という学び）から、学生たちが大きく成長している姿を目の当たりにして、あらためて“場づくり”の重要性を感じた。



AED講習会



AEDを実際に使った講習会



イベント当日朝（旅館玄関）

### ■<想定外を想定内にしてしまう学生たちの感性>

スタート地点、小湊鉄道「養老溪谷駅」に予定通り8:30に到着、9:30のトロッコ列車の到着を待つ間、学生たちに明らかな“戸惑いの表情”が見えた。たぶん列車が到着した後の受付に繋がる流れが読めなかったのだと思う。時々小雨が降り、肌寒く、仕方がないことだが、「これから楽しいイベント!」という雰囲気では正直言ってなかったし、そも



模擬受付をする学生たち



役割の確認



実際の受付の様子

そも受付はスムーズに進むのだろうか？という不安が大きかったように感じた。傘やカップも不安材料であった。視界が狭くなり、一般のお客さんとイベント参加者がごちゃごちゃになりはしないか？という不安もあったのだろう。こうした“想定外”に対し、たまに聞くのは「教わっていません」「聞いていません」「知りません」という決まり文句だ。見ていると学生たちは事前打ち合わせでは全く想定していなかったOJT（on the job training）を始めていた。受付役と、参加者役に学生が分かれて模擬受付を行い流れの確認を始めたのであった。

この瞬間、学生たちは全員ひとまわり大きく成長していた。全員が頼もしく見えた。

列車が到着してしばらく様子を見てみると、不安な要素はまったくなかった。彼ら彼女たちは、笑顔で声をだし、「おはようございます！お疲れ様です！古道歩きイベントの受付はこちらです！」と自分たちで雰囲気を作り出してくれていた。その声と明るい表情をみて、参加者の皆さんの表情も明るくなり、不思議な感覚だったが、養老溪谷駅前は「わくわくするような空気」に変容していた。（写真参照）

### ■<旧福野小学校の大きかった存在意義>

まちおこしを成功させるカギは「よそ者」「若者」「馬鹿者」とよく言われる。今回のイベント（「ローカル線と古道歩き」）にその言葉を例えるならば、「よそ者」は本学の関係者、「若者」の中心はもちろん地元の高校生、そして本学人間社会学部の学生たちという事になる。「馬鹿者」とは、もちろんものの例えであって、敢えて言うなら「今までの既成概念や過去の経験に縛られない、自由発想のできるフレキシブルな考えを持った者（頑なに保身的、自己防衛的な者から見れば“馬鹿者”）」であろう。

一方、最近では違った視点で地域活性化に必要とされる要素を表現している。何かと言えば「商店街」「祭り」そして「小学校」だそうだ。

商店街と祭り（イベント）は「ローカル線と古道歩き」においても重要な役割を担っている。後述するが、ゴールの久留里駅前で、参加者をあたたかく出迎えて頂いた中心には久留里駅前商店街の方々がおられたし、「ローカル線と古道歩き」は高大連携、特に地元

の高校生の“顔が見える”新たなお祭りであり、地域イベントであったと思う。

3つ目の「小学校」は、同じ小学校を卒業したという“繋がり”が、地域活性化において地元住民が本気になるための重要な要素であるという視点でよく語られているキーワードだ。

今回のイベント（里山コース）のほぼ中間地点に廃校となった福野小学校があり、前述のとおり、普段立ち入ることができない校舎内を休憩スポットとして活用、ウォーキングイベントでは必須のトイレ休憩、水分補給場所としての活用はもちろんだが、さらにもっと重要な要素は、その廃校という地域の文化財を有効活用して、地元木更津東高校の学生さんが企画提案された「お弁当」と「和菓子」をそこで校長先生、教頭先生と一緒に生徒さんと販売したという事だ。

#### ■＜イベントに付加価値をもたらした廃校の有効活用＞

千葉県君津市立福野小学校は、明治33年に創立され、創立100年目となる平成14年3月に廃校となっている。最後の児童数は6名、廃校から15年経った今も、木造校舎は当時の思掛けをそのまま残している。

今までに2回ほど、学生と一緒に下見を兼ねたALで現地を見てはいたが、校舎の中は窓から覗く程度で内部を見ることはできなかった。当日の校舎内のレイアウト、トイレの状態等については、君津市観光課の方々にお任せするしかなく、事前確認できていたのは、校舎内の下足移動程度であった。

イベント当日、里山コース参加の方々とアシスト学生十数名が無事休憩スポットである旧福野小学校に到着した。入口は開放され、君津市役所の観光課長が自ら一行を出迎えて頂いた。事前の打ち合わせ通り下足のまま中に入ることができた。そこは本当に不思議な空間であった。参加者が皆同じ雰囲気を楽しんだであろう。場所は違っていても、そこには昔学んだ“小学校”の面影がしっかりと残っていた。いわゆる“木造校舎”の匂いも感じることができた。廊下、壁、階段、机、椅子、そして黒板…参加者は疲れを忘れ、口々に皆それぞれの昔の思い出を笑顔で語り合っておられた。(写真参照)

校舎の一番奥の大教室の入口に木更津東高校の学生さんが和菓子を販売しており、その隣が大学生が担当するお弁当コーナーがあった。入口で高校生、大学生から「お疲れ様でした！」と笑顔で挨拶され、参加された皆さんは本当に楽しそうに奥のテーブル席へと向かわれていた。

決して豪華でも、綺麗でもない。多少薄暗い教室の中、でもそこには演出でない“おもてなし”があった。しかも手に取ったお弁当を企画した高校生がすぐそばにいて、その高



## 高大連携による活性化の効果

校生たちが和菓子まで企画に参加，販売まで行っており，お弁当を手渡ししてくれているのは高大連携の大学生だ。さらに言うなら，その場の準備は君津市役所の方々朝早くから担ってくださり（トイレの男女分けにカーテンも付けて下さっていた），木更津東高校の校長先生，教頭先生まで駆けつけて下さっていた。ちなみにお弁当は木更津で割烹料理店を営む「四季味宴席たく」の社長が全面的にご協力くださり，高校生たちの企画に込められた思いを忠実に，しかも日本酒で有名な久留里から酒粕を仕入れ取ってメニューに加えて下さっていた。和菓子も木更津東高校近くの和菓子の名店「さわや」が協力して下さった。

ほんの1時間弱程度の滞在時間であったが，そこには凝縮された“地域住民”の思いがあった。その思いを引き出し，繋げたのは「若者（高校生，大学生）」だ。

食事が終わると参加された方々は，その日だけの特別校舎内見学を楽しんだ。廃校になって15年が経過しているが，残された机，椅子，そして黒板，校舎にあるすべての物から，不思議な郷愁が醸し出されていた。あらためて“廃校”という地域の財産がいかに大事であり，またその価値を見直し，さらにその価値を活かすのも，地元地域の「馬鹿者」



校舎内休憩場所



お弁当のお渡し場



校舎内子弁当の看板



校舎の入口



手洗い場



教室内



二階の廊下



階段



廊下

「若者」「よそ者」の役割なのだろうと感じた。

### ■<里山コースの一行は一路久留里駅へ>

食事休憩と校舎内見学を終えた一行は一路久留里駅へと向かった。一般向けのコースとは言いながらも、未舗装の道、手掘りのトンネルもあり(写真参照)、里山の雰囲気を楽しむことができた。イベント参加者一行の前後、中間に学生アシスタントが同行し、先頭は道先案内、中間では先頭と最後尾の距離が開きすぎないように調整をしていたし、最後尾は常に全体の人数を確認しながら、救急セットやAEDも携帯していた。旧福野小学校までの前半はひたすらルートを間違わないように黙々と歩いていたが、お弁当を食べ、一息ついた後半には少し変化が見られた。学生たちと参加者が何やら会話をかわしながら楽しそうに歩く光景が増えていたのだ。

何気にその会話を聞いてみると、参加者ご自身の昔話やら、どこから来られたのかとか、そして学生たちには、「今何を勉強しているのか?」「なぜこのイベントに参加しているのか?」「将来の夢は?」などのいわゆる質疑応答が自然な流れ(歩き続けるという自然な流れ)の中で交わされていた。普段なら「そんなことなぜ聞くの?」という質問に対し、学生たちは丁寧に、そして生き活きと、自分の言葉で“語る”ことができていたし、参加された方々も、普段ほとんど会話などする機会などない“今どきの若者たち”との会話を楽しんでおられた。そうした光景を眺めながら二つのことを考えていた。

一つ目は、このイベントに至る2年間で学生たちは久留里商店街のお店を取材し、「るるぶ」という雑誌編集のALに参加し、地域の魅力、里山の歴史を学び、地元の高校生との交流を行ってきたという点だ。そうした実際にやってみるという“学習”を通して学生たちは「コミュニケーション基礎力」を磨くことができていたのだと思う。

二つ目は「廃校の中に立ち入り、その瞬間タイムスリップしたかのような不思議な体験ができた」という点だ。心理学、特に認知症高齢者に対するリハビリテーションの一手法



手掘りのトンネル



参加された方々と歩く学生たち

として「回想法」<sup>12)</sup>があるが、この体験はお互いに、自分自身の歴史を振り返り、「思い出」、「なつかしさ」、そうした“記憶の引き出し”を久しぶりに開けながら（オープンなマインド状態）、会話を楽しむきっかけになっていたように感じた。

### ■<ゴール地点（久留里駅前）での歓待>

予定通りトラブルもなく、里山コースの一行は最終ゴールの久留里駅へ向かっていた。久留里駅前商店街に入ると道端に“水飲み場”があって、一行は最後の休憩を取った。

そこからゴールまでは300mくらいで、だんだんと薄暗くなってゆく歩道に立ちながら最終ゴールの状況をイメージしていた。それは当然イメージする“想定”かも知れないが、ここまで高大連携という、しかも高校生の提案の実現に地元商店街、行政、商工会議所、JR東日本、等が協力し、今までにない「観光による（「ローカル線と古道歩き」）地域活性化」が実現し、そのイベントが無事に終わろうとしている。もしかしたら、ゴールではささやかかも知れないが、“お迎え”があるのでは？という期待感を抱いていた。ただ、何時に到着するかわからない中で、さらに言うなら「里山コース」「古道コース」が別々に到着するというファジーな状況で果たして地元の方々が迎えに出てくれるものだろうか？という不安もあった。正直言って不安の方が勝っていたかも知れない。



久留里の名水に足をとめる参加された方々

### ■<思いがけない感動>

イベントのラストは先頭に立ちながら参加された方々を久留里駅前へと誘導した。商店街から信号のある角を曲がって百メートルほど先が駅前ロータリーなのだが、目にした光景は人気のないいつもの駅前とは違っていた。何やら大勢の人たちがおられ、カラフルなテントが見えてきたのだ。

正直言って何がどうなっているのか、想像できていなかった。イメージしていたのは、駅舎の前に駅長を含めた何人かの方々が出迎えて下さっているという程度のものだった。

---

12) 山口晴康（2008年）『認知症予防』協同医書出版社 P194



駅前で甘酒や豚汁をサービス



里山コース集合写真

駅に近づくと、駅前ロータリーにおられる方々全員がこちらの方に視線を向け、「お帰りなさい!」「お疲れ様でした!」という声も聞こえてきた。どの顔も笑顔で、本当にこちらから“お待ちしておりますよ!”という優しい笑顔とイベントを歩き終えた方々に対するねぎらいの言葉かけをしてくださった。

本当に涙が出そうになるほど感動的だった。当然のことだが、参加された方々もまさかの“サプライズ”に疲れは吹っ飛び、学生諸君も皆、最高の笑顔で出迎えの人々の輪の中へ吸い込まれ、地域の方々、テントのもてなしの方々、出迎えて下さった駅長以下、行政、学校関係者が一体となった素晴らしいラストシーンが展開されたのだった。

テントには“のぼり旗”も立てられ、甘酒と豚汁は参加メンバー、学生たちに無料でふるまわれたし、他のテントでは地元の名産品をお土産として販売されていた。地元君津青葉高校の先生方、生徒さんもテントを設置して出迎えてくださり、そのテントには、高校生たちが栽培した野菜が展示されていた。(販売でなく、展示になっていたのは、前日に開催された別イベントでほぼ完売してしまい、残念ながら展示用に1種類ずつ残しておいて下さったとの事だった。)

#### ■<古道コースの一行が無事にゴール>

里山コースの一行がゴールしてから30分ほど遅れて古道コースの一行が無事にゴールされた。あたりはもう夕暮れだった。しかし、その薄暗い駅前ロータリーがテントの明かりで照らされ、出迎えの方々からの声、そして地元のみなさんのおもてなし、歓待の雰囲気、何とも言えない感動的な雰囲気を醸し出していた。

プロジェクトリーダーの鈴木孝男教授も、無事に一行がゴールできた安堵感と、まさかの出迎え、おもてなしサプライズに本当に嬉しそうに出迎えて下さった方々と次々に挨拶と言葉を交わしておられた。

しばらくの間、もてなされた甘酒、豚汁を食しながら、参加された方々も、地元の方々

## 高大連携による活性化の効果

も学生たちも、“ごちゃ混ぜ”になって様々な会話を楽しむことができていた。その姿は、このイベント（「ローカル線と古道歩き」）が起爆剤、接着剤となり、「よそ者」「若者」「バカ者」が一体となる地域活性化の象徴的な場面であったように感じた。

久留里線の発車時間までの間、参加者にはアンケート調査に協力して頂き、最後に私たちは駅改札口に向かう参加された皆さんに笑顔で手を振りながら、お見送りをさせて頂いた。

地元の皆さんもお見送りが終わると、テントの片付けを開始されていた。その脇で私たちは学生リーダー、鈴木孝男教授を中心に振り返りと反省会を行った。



到着された古道コースの一行



イベントの振り返りと反省会

### ■<アンケートの集計結果から>

参加された39名の内、33名からアンケートの回答を頂いた。満足度については、大変満足16名、やや満足9名、普通2名、やや不満足、大変不満、その他は0であった。「印象に残った場所」としては、“古道歩き”4名、“学生の対応が良かった”4名、“弁当が美味しかった”3名、“旧福野小学校”5名、“紅葉”4名であった。

要望等、自由記載には「弁当が美味しかったです」「学生さんや参加者の方と良き交流が持てて、楽しいひとときでした。感謝！」というコメントも頂いた。

アンケートからは参加された方々が今回のイベントに対し、概ね満足して頂けたことがわかった。そしてその要素に“学生”の存在が大きかったことが読み取れる。美味しいお弁当を企画してくれた木更津東高校の生徒さん、旧福野小学校で“おもてなし”をしてくれた高校生、大学生、そして、古道歩きのガイドをしてくれた若者たちとの“交流”が楽しかったという方もおられた。そして、本当の意味で“振り返りと評価”が必要なのは、このイベントの企画、準備、当日と、大活躍してくれた高校生、大学生に対してだろう。このALに参加することが学業、学科の評価にダイレクトに結びつく訳でもなく、それこそ点数評価されるものでもないこの“やってみる学び”に対し、何を感じ、実際に達成感

を感じることができたのか？新たな課題認識ができたのか？我々教員がしっかりと高大連携という枠組みの中で、学生たちと向き合う必要があると感じた。

## 第4節 今後に向けての課題

### ■＜高大連携がもたらした効果について＞

地域活性化という社会課題に対し、高大連携による「ローカル線と古道歩き」というイベント開催が大きな効果性を発揮した。地域活性化の本質的課題は、どうすれば地域住民、地域の若者たちが本気になるかどうかであった。そのためには、“若者の目線、視点、感性”が必要であり、それを引き出す“仕掛け”としての高大連携が大きな役割を果たしてくれた。もちろん主役は高校生、大学生であったが、その若者たちの“本気度”に触発された大人たちが動き出してくれたように感じた。地元商店街、観光協会、自治体、JRなど、地域が一体となって協力体制を築いてくれ、イベントのゴールであった久留里駅前で、参加された方々を出迎えて頂いたパフォーマンスは“地域が一体となった”象徴的な出来事だった。

振り返ってみると、若者たちの“目線”を知る上で「フォトコンテスト」「夢づくりコンテスト」の仕掛けは予想以上の効果性があつた。若者たちの感性で撮影された写真には、大人たち、よそ者とは違った“魅力”がどの写真からも読み取ることができたとし、夢づくりコンテストで高校生たちが行ったプレゼンテーションには地元の若者たちの熱意と迫力を感じ取ることができた。その“迫力”には自分たちの地域の魅力を掘り起こし、伝え、知ってもらい、その魅力発見が継続的な地域活性化に繋がるという“物語り”があつた。

その“物語り”は大人たち（地元の商店街、自治体、企業、地域住民）の心を揺り動かす「協力する」という具体的な行動へと導いてくれた。

### ■＜成果と意義について＞

このイベントに参加してくれた若者たちは、皆“いい顔”をしていた。その背景には、やらされているという受動的な感覚ではなく、自らが動機付いた内発的、自発的な“やる気”があつた。その“やる気”は高大連携という新たな枠組みのなかで、チームとして協働し、プレゼンテーションを行い、そのパフォーマンスの過程と成果が評価される（認められる）というプロセスを経ながら、新たな前進へと進化して行った。

さらに大事なことは、高校生が大学生と連携しながら地元目に向け、地域と一緒に開催されたイベントに多くの参加者があつた。その参加者（よそ者）から高く評価さ

れるという、理想的な地域活性化パフォーマンスを実現してくれたという事だと思う。「ローカル線と古道歩き」というイベントを通して、地元の若者たちと、大人たちが本気になって取り組む地域活性化の第一歩が実現したのだと思う。そこには地域の社会的な課題に対し、地元の若者、大人たちが自らの意志で向き合い、関わる“きっかけ”という社会的意義もあったと考える。

### ■<これからの課題について>

高大連携をベースとした「ローカル線と古道歩き」が大きな効果を生み、そこに社会的な意義も見出されたと述べたが、今後に向けて課題も残されている。

最大の課題は「サステナビリティ（継続性）」だ。本来の地域活性化は単発の打ち上げ花火的なものではなく、地域住民が本気になり、継続的に地域住民と「若者、よそ者、バカ者」が関わりながら進化、発展して行かねばならない。しかもその活性化を少子高齢化の進捗が著しく、若者たちの流出に頭を抱える地方都市で実践するとすると、主役は若者だろう。仕掛けを大人たちがするにしても、その仕掛けの中に若者を絡めていない仕掛けは、大体が大人たちの自己満足的な、単発イベントに成り兼ねない。だからこそ高大連携なのだ考える。

しかしながら、そこにも課題はある。高大連携というお題目を唱えていれば、済むものではない。地域を本気にさせる高大連携にはしっかりとした“ビジョン”が必要だ。そしてその“ビジョン”を学生たちに“語り、地域住民、自治体、商店街等を巻き込む“仕掛け人”が必要だ。その仕掛けに魅力があれば、そこに金銭的な支援も生み出されるだろう。

そうした役割を果たせるセンスと能力を持った“プロジェクトリーダー”の存在こそがこれからの最大の課題だと考える。その役割を“教員”が担うことが理想かも知れない。

今回の「ローカル線と古道歩き」も振り返ると、本学人間社会学部のアクティブラーニングとして「久留里線プロジェクト」からスタートしており、2015年4月～2016年11月の長期にわたってプロジェクトをディレクトしてこられた鈴木孝男教授の存在があったから実現できたイベントだ。だとすると、今後、あらためて「高大連携」と「地域活性化」を実践論的に考えるならば、プロジェクトリーダーとしての教員の存在、そしてそうしたセンスと行動力を持った教員の育成こそが最大の課題かも知れない。高校、大学、双方でそうした教員が育成され、そこに学生たちが関わることによって、また、そうしたAL（やってみる学び）から多くの学生が“社会人基礎力”を身に付け、社会で活躍してくれることを望みたい。

このイベントに参加してくれた高校生3年生の多くは大学に進学し、大学4年生はほぼ

全員が社会人としてそれぞれの分野で活躍してくれるだろう。「ローカル線と古道歩き」をともに企画、参画してくれた若者たちが、“関わったイベントをやり遂げた”という達成感だけでなく、その経験をそれぞれの地域で、未来に繋がる課題解決の担い手として、これからも成長し続けてくれることを願いたい。